

西洋中世学会第 16 回大会（2024 年）ポスター報告要旨

2024 年 6 月 16 日（日）

於 富山大学

1. 高木 麻紀子 TAKAGI Makiko（明治学院大学）

越境するイメージ

- ソミュール城の〈野人のタピスリー〉研究 -

Images Across Borders: A Study of the Wild Man's Tapestries at the Château de Saumur

フランス、ソミュール城の〈野人のタピスリー〉（1470 年頃）は、規模と質の両面で中世末期世俗タピスリーを代表する優品である。近年、下絵制作者の特定については研究の進展がみられたものの、図像解釈に関しては未だ定説を得るに至っていない。2022 年の報告では、トゥアール子爵ルイ・ダンボワーズの再婚が制作の契機と考えられること、また、同時代のフランス・南ネーデルラントで制作された野人のタピスリーとの図像上の相違点を指摘したが、その所以と意味するところは解明できなかった。本報告では本作全体のテーマを明らかにするため、ドイツ語圏の造形芸術との比較を試みる。

2. 伊藤 喜彦 ITO Yoshihiko（東京都立大学）

イベリア半島、サルデーニャ島、シチリア島に現存する初期中世のドームについて

A Study on Early Medieval Domes in Iberia, Sardinia, and Sicily

標題の地域において、主として 6～10 世紀頃建設とされるドームについて論じる。これらのドームの空間構成、建設材料、工法、構造形式などをまとめながら、以下の点について検証する。

- 1) ビザンティンやイスラーム建築の影響、あるいはよりざっくりと「東方」の影響と論じる学説史の蓋然性
- 2) 同地域内における多様性
- 3) 地域間に見られる共通性

以上を踏まえ、古代末期～初期中世地中海西部における建築文化の「遅さ」について考察する。

3. 工藤 義信 KUDO Yoshinobu (石川県立看護大学)

ピーター・イドリー『息子への教え』における女性読者

Female Readership of Peter Idley's *Instructions to his Son*

中世後期ヨーロッパの俗語の所作指南書の多くが指南者と受け手のジェンダー及び相互の関係性を明示している中、材源における妻から夫への助言を父から息子への教えに置き換えた15世紀の英語の所作指南書『息子への教え』は教訓の内容や力点に指南者と受け手との関係性の転換を踏まえた翻案が見られる点で注目に値する。材源からの翻案と、女性に読まれたと考えられる現存写本に認められる作品受容の双方から、『息子への教え』における女性に関する助言の性質について検討する進行中の研究課題を報告する。

4. 菅野 磨美 KANNO Mami (金沢大学)

聖なる身体をめぐるイデオロギー

- Osbern Bokenham と 'englische boke ... of seyntis' -

Ideologies Concerning Saintly Body: Osbern Bokenham and his 'englische boke... of seyntis'

聖人伝は、聖人が起こす奇跡や聖遺体の移葬など、身体にまつわるエピソードを含み、西洋中世における聖なる身体をめぐるイデオロギーについて多くの示唆を与えるテキストである。本ポスター報告は、15世紀イングランドで多くの聖人伝を残した Osbern Bokenham の中英語聖人伝 (englische boke ... of seyntis) に焦点を当て、彼がイングランドの聖人に特徴的であると記述した、聖人の腐敗しない身体など、聖人伝テキストに描かれた聖なる身体について考察する。

5. 飛鳥馬 一峰 ASUMA Kazutaka (東洋大学)

中世の年代記における教皇像

- サリンベネ・デ・アダム『年代記』の分析から -

The Image of Popes in Medieval Chronicle: An Analysis of Salimbene de Adam's 'Cronica'

本報告では、13世紀の著名な年代記であるサリンベネ・デ・アダム『年代記』における各教皇に対する描写を分析することで、教皇庁外の聖職者が歴代の教皇をどのように認識していたのかを考察する足掛かりとする。特に教皇の死に関する描写と故人としての教皇を描写する際の表現に着目し、托鉢修道士としてイタリア都市に生きたサリンベネが死者となった教皇をどのように評価し取り上げていたのかを検討する。

6. 加藤 政夫 KATO Masao (学習院高等科)

高等学校の世界史における西洋中世史—その可能性と限界—

- 事例⑬ 歴史科目における教育内容とは何か? -

European Medieval History in High School History Education: What is subject content?

教職課程の講義において、「教育内容 (subject content) と教材 (subject matter) は混同されがちであるが別物であるので気を付けるように」とよくいわれる。その際、「教育内容とは児童生徒に習得させたい内容のことである」と説明が続く訳であるが、受講している大学生のなかには、史学科の学生であっても「歴史の授業における教育内容が何であるのか、いまいちピンとこない」と反応する学生も少なくない。今回のポスター報告では、「歴史」や「高校世界史」の授業における「教育内容」とは何か検討したい。

7. 福田 智美 FUKUDA Tomomi (東北大学)

エリザベス 1 世の枢密院の地理的特徴

Geographical Features of the Privy Council during the Reign of Elizabeth I

エリザベス 1 世期の枢密院の枢密院には固定された開催場所がなかった。ロンドンの宮殿で開かれることが多かったものの、地方での開催や個人宅での開催も散見される。先行研究では、中世から近世への変化の中で裁判所などは開催場所が固定したことを制度化の根拠としている。エリザベス 1 世期の枢密院におけるそのような場所の不確定性と、女王の巡幸や国王評議会との関係から、エリザベス 1 世期の枢密院の特徴を探りたい。

8. 近藤 真彫 KONDO Mahori (宝塚大学)

《シトーの聖書》におけるロマネスク聖書本の挿絵装飾プログラムの伝統

The Cîteaux Bible: a Tradition of Bible Illumination in the Romanesque Period

《シトーの聖書》(ディジョン市立図書館) は、シトー会で使用する聖書本の手本とすることを意図して、12 世紀初頭にブルゴーニュ地方のシトー修道院で制作された。本書は美術史においてフランスのロマネスク彩飾写本の代表例として紹介されてきたが、先行研究では個別の図像に注目したものが多い。本報告では、この聖書本としての全体的な挿絵装飾プログラムの特徴を整理し、初期シトー会における伝統の再構築について考察を試みる。

9. 樋口 諒 HIGUCHI Ryo (名古屋大学)

ブルガリア共和国ゼメン修道院主教会堂の創建当初の形態に対する復元的考察

Zemen Monastery in Bulgaria: Reconstructing the Katholikons's Original State

ブルガリアの南西部に位置するゼメン修道院の主教会堂スヴェティ・イオアン・ボゴスロフ（神学者ヨハネ）教会堂は、最下層の壁化の様式から 11 世紀の創建とされる。本教会堂はオスマン帝国支配下のある時期に放棄された後、19 世紀末に付近の村人らによって当初とは異なる形態で復元された。本発表では、23 年末に行った調査による三次元計測結果に基づきつつ、ビザンティン建築における本教会堂の位置づけとその当初の姿について考察する。

10. 戸田 伶 TODA Rei (早稲田大学)

中世医療テキストに見る女性の身体に関する「秘密」の変化

The Transformation of “Secrets” about Women’s Bodies in the Medieval Medical Texts

中世における妊娠や出産など女性の身体について言及する医療テキストに関して、医学史家のモニカ・グリーンは、13 世紀を変わり目として「婦女の疾病」から「婦女の秘密」へと題名や記述内容が変化の様子を論じた。医療において、女性の身体について秘されるべき事柄に変化が生じたのである。本報告ではこのグリーンの論考を基にして、12 世紀にサレルノで編纂されたとする女性の医療・美容テキスト『トロトユーラ集成』を分析し、上記の時間的枠組みの転換期について考察する。

11. 松本 ゆり MATSUMOTO Yuri (早稲田大学)

イングランド宗教改革期ウェールズにおけるカトリシズム

Catholicism in Wales during the English Reformation

エリザベス 1 世のもとで成功したとされる宗教改革はカトリック的な信仰の形の根絶の過程ではなかったとみられている。この前提のもと、どのようにして改革前とは異なる形のカトリック信仰が形成されたのかを考察する。

今回着目する地域はカトリック教徒が多く残っていたとされるウェールズと国境付近のマーチ地方である。この地で見られた宣教師と信仰の護り手である貴族およびジェントリとの関係、共同体の形成、国家との関わり方をみることで、イングランド宗教改革期ウェールズにおけるカトリック信仰を捉えていく。

12. 太田 英侖奈 OTA Elena (早稲田大学)

パリ国立図書館ギリシア語 74 番写本に描き出されたパトロンの自意識

The Patron's Self-Consciousness as depicted in Paris cod. gr. 74

パリ国立図書館が所蔵するギリシア語 74 番写本（11 世紀、以下パリ 74 番）は中期ビザンティン写本芸術における金字塔的作品であると同時に、非常に特異な肖像表現が見られる型破りな作品でもある。本報告ではパリ 74 番を通じて 4 回描かれているパトロンの肖像に彼の自意識がどのように表現されているかを取り上げる。続いて、本来皇帝のみに許される構図を借用している点などから、パトロンの自意識の「過剰さ」を指摘する。

13. 長友 瑞絵 NAGATOMO Mizue (東京藝術大学大学美術館)

《ラインの画帖》のなかの『フィシオログス』について

- 中世のモデル・ブック再考にむけて -

The *Physiologus* in the “Reiner Musterbuch”: Towards a Reconsideration of the Medieval Model Book

《ラインの画帖》（オーストリア国立図書館 Cod. 507, 13 世紀初頭）は中世美術史上、現存する貴重な手本帖（モデル・ブック）として知られる。しかしその一部に、中世に人気を博したキリスト教的博物譚『フィシオログス』（*Physiologus*）からの引用が収録されることはあまり知られていない。そこで引用箇所を具体的分析を通じ、同画帖に従来の〈手本帖〉の定義には収まらない要素があることを指摘したい。

14. 高野 禎子 TAKANO Yoshiko (清泉女子大学名誉教授)

シャルトル大聖堂の北薔薇窓を読む

What does the North Rose Window of Chartres Cathedral depict?

シャルトル大聖堂には 3 つの薔薇窓があるが、中でも最も美しいと讃えられてきた北薔薇窓に注目し、歴史的背景・窓の内外装飾・聖母崇敬の観点から考察する。修復の成果やステンドグラス技法をも紹介しつつ多角的に捉えてみたい。